

令和7年度前期「『みんなで成長』アンケート」の結果について

平素は本校教育活動にご理解、ご協力いただき、ありがとうございます。

さて、7月に実施いたしました「『みんなで成長』アンケート」につきまして結果をまとめましたので、みなさまにお伝えいたします。なお、今年度の質問項目につきましては、学校運営協議会との協議のもと変更させていただいております。また、学校運営協議会でも本結果をもとにご意見を頂戴しましたので、その内容も併せて記載しております。本結果をもとにこれまでの教育活動等を振り返り、本校の子どもたちはもちろんのこと、本校に関わりのある方々も含めまして共に「みんなで成長」できる下鴨教育をめざしていきます。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

学校教育目標

学びを創造し、
共に挑戦する
子どもの育成

めざす子ども像

下鴨小の「a・i・u・e・o」

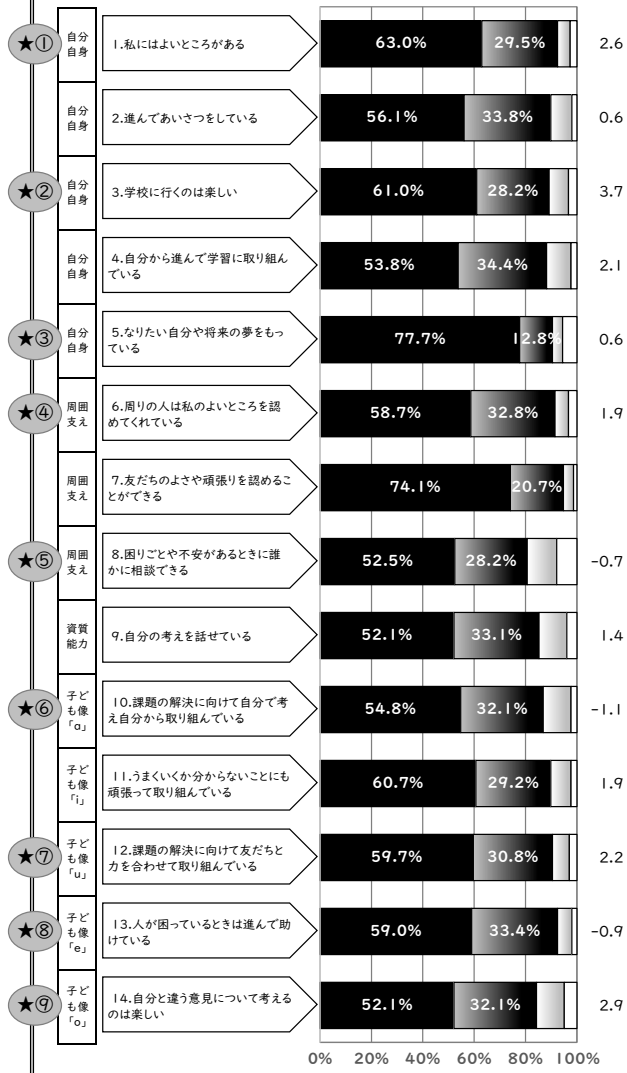
- a**mbition : 見通しをもった志のある子
- i**nnovation : 新たなことにチャレンジする子
- u**nity : 共に力を合わせる子
- e**steem : 自分も相手も大切にする子
- o**riginality : 自分らしい学びを創り出す子



【児童】

有効回答数：305

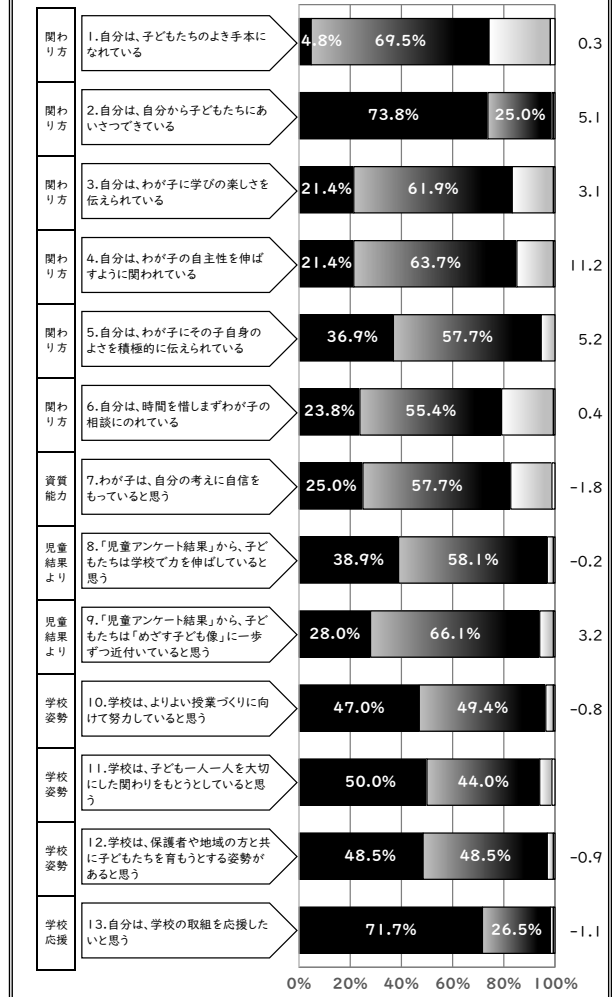
令和6年度前期の肯定的回答率との比較



【保護者】

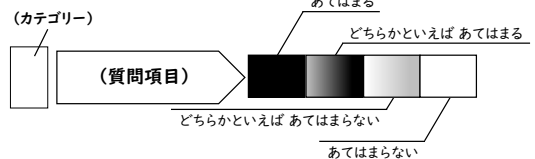
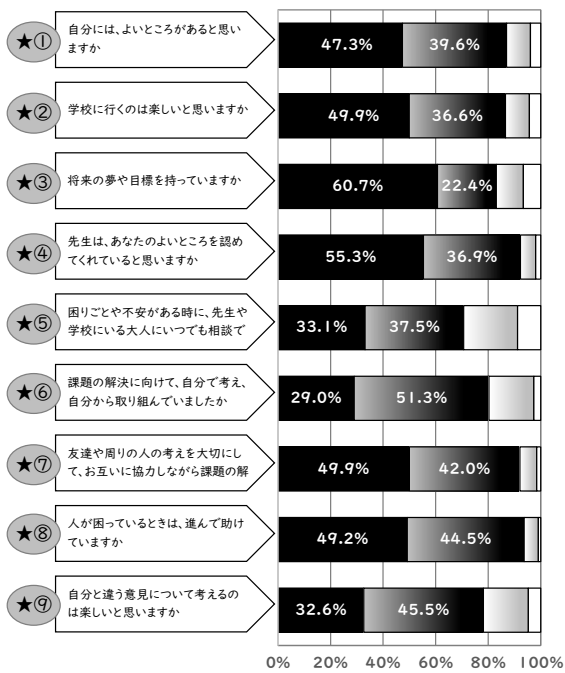
有効回答数：168

令和6年度前期の肯定的回答率との比較



全国的な傾向は…

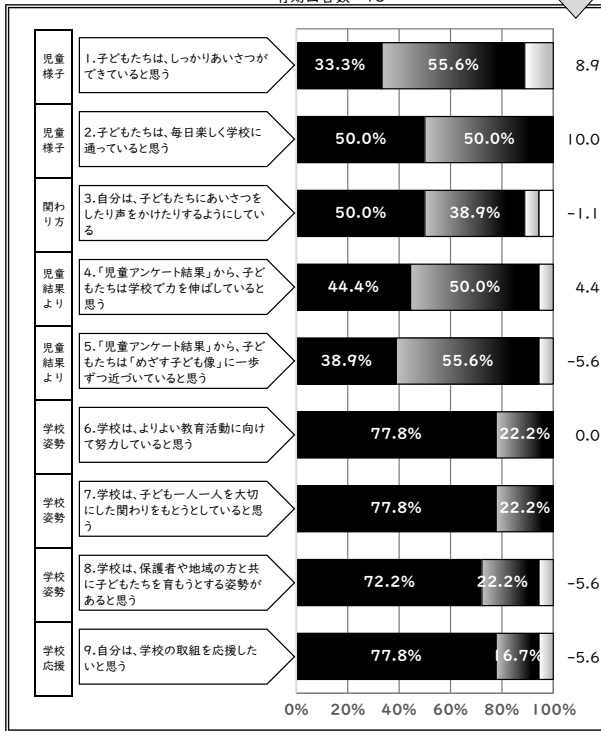
【参考】 文部科学省・国立教育政策研究所「令和7年度 全国学力・学習状況調査」報告書「質問紙調査」より



【地域】

有効回答数：18

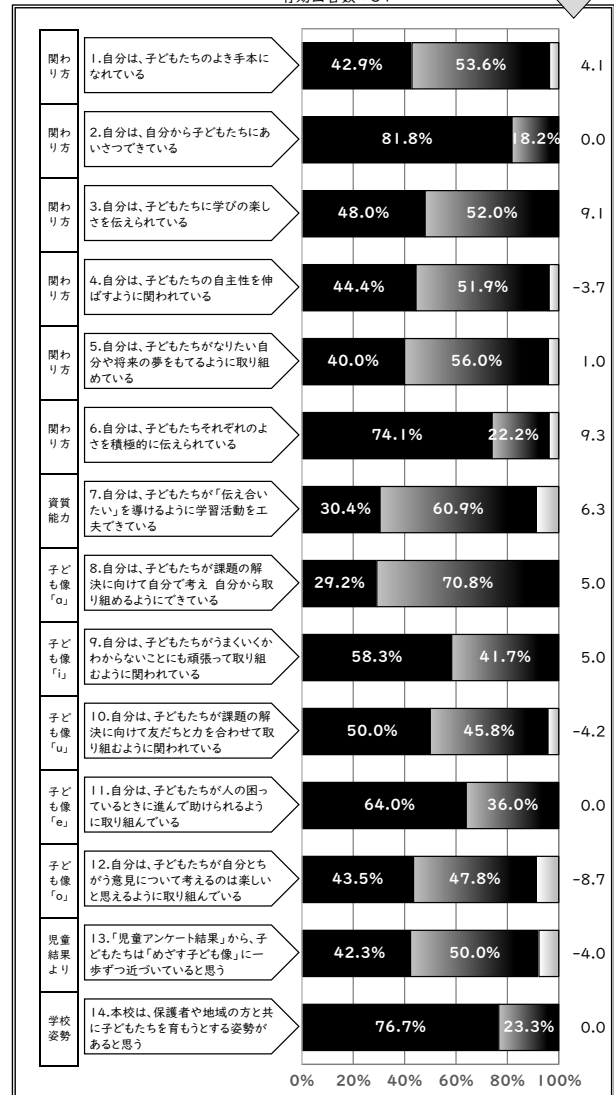
令和6年度前期の肯定的回答率との比較



【教職員】

有効回答数：34

令和6年度前期の肯定的回答率との比較



《各アンケート結果より》

児童アンケートより

児童アンケートにおいて、「2. 進んであいさつをしている」という項目では、「あてはまる」が56.1%、「どちらかといえばあてはまる」が33.8%と、保護者や教職員の回答結果に比べて低い傾向が見られました。地域の回答結果からも、児童のあいさつの積極性に課題があることが分かります。児童はあいさつを返すことはできても、自ら進んで行う姿にはまだ十分に至っていません。そこで、まずは自分から声を出してあいさつすることを通じて、自ら発信できる力を育てることを目指し、学校全体で取り組んでいきます。

次に、「9. 自分の考えを話せている」「14. 自分とちがう意見について考えるのは楽しい」という項目では、今年度の育成目標である「伝え合う意欲」に基づき、昨年度より一歩進んだ姿をめざして取り組んでいます。肯定的回答がわずかに増加していることは、教職員の意識的な取組の成果と捉えています。児童が自分の考えをもち、自信をもって話せるように、考える時間の確保や話し方の工夫など、様々な支援を行っています。ただし、「14. 自分とちがう意見について考えるのは楽しい」の項目については、「あてはまる」と回答した児童が約半数にとどまっており、話すことだけでなく、聴くことへの意識も高めていく必要があります。すべての児童が自分の考えを出せるような工夫を重ね、自分と違う意見に触れることで新しい視点や知識を得ることができ、自分の考えを広げたり深めたりすることにつながるような授業改善に努めていきます。

最後に、「1. 私にはよいところがある」という項目では、約9割の児童が肯定的に回答しており、大変喜ばしい結果です。しかし、約1割の児童が否定的に回答していることから、自己肯定感に課題を抱える児童もいることが分かります。「6. 周りの人は私のよいところを認めてくれている」という項目でも同様の傾向が見られます。少数とはいえ否定的に回答している児童がいるという現実を常に心に留め、今後も互いに認め合うことを大切にし、自己肯定感を高める取組を学校全体で進めていきます。

保護者・地域アンケートより

「保護者アンケート」中に記述にいただいたご意見等については、10/6(月)～10/10(金)の9:00～17:00まで職員室にて閲覧していただけますので、ご希望の方は職員室にお声かけください。

保護者・地域アンケートの結果からは、「〈保護者〉12・〈地域〉8. 学校は、保護者や地域の方と共に子どもたちを育もうとする姿勢があると思う」という項目では、保護者97.0%、地域94.4%の肯定的な回答があり、大変ありがたい結果となりました。子どもたちが直接目にするのではない場面でも、保護者や地域の方々に支えられていることが多く、今後は皆様方の支援の存在を子どもたちにもっと伝えていきたいと考えています。

また、「〈保護者〉6. 自分は時間を惜しまずわが子の相談にのれている」という項目では、約2割の保護者が否定的な回答をされています。児童アンケートでも「8. 困りごとや不安があるときに誰かに相談できる」という項目で、肯定的回答が80.7%、否定的回答が19.3%となっており、子どもたちが気軽に相談できる相手がいないと感じている現状が見えてきます。子どもたちにとって身近な存在である友達、教職員、保護者など、誰かに安心して相談できる環境を整えることは必要不可欠です。学校では、子ども同士のつながりを大切にするとともに、子どもを中心に据えて、学校・保護者・地域が互いにつながりを深め、子どもの困りや悩みにいち早く気付けるような関係づくりをめざしていきます。

教職員アンケートより

教職員アンケートの結果において、「6. 自分は、子どもたちそれぞれのよさを積極的に伝えられている」という項目では、96.3%の教職員が肯定的に回答しました。これは、教職員が一枚岩となって日々児童のよさに目を向け、伝えようと意識し、努力している結果ではないかと振り返っています。しかし、児童アンケートでは「1. 私にはよいところがある」と感じられていない児童が約1割存在しており、教職員の思いがすべての児童に届いているとは言いきれません。今後も、児童一人一人の素敵な部分を認め、自己肯定感の向上につながるような働きかけを継続していく必要があります。

また、「7. 自分は子どもたちが『伝え合いたい』を導けるように学習活動を工夫できている」では、肯定的回答が91.3%と高いものの、他の項目と比べると「あてはまる」の回答はやや低めの結果となりました。これは今年度の育成をめざす資質・能力に関わる内容であり、現状に甘んじることなく、より高みをめざしたいという教職員の自律的な意識の表れと捉えています。教職員同士でも互いのよい実践を認め合う声かけを大切にし、「みるみるWeek」と称して授業見学を行い、よかった点を伝えるなど、授業改善に向けた取組も進めています。

さらに、「12. 自分は子どもたちが自分とちがう意見について考えるのは楽しいと思えるように取り組んでいる」も91.3%と、やや厳しめの結果となりました。育成をめざす資質・能力につながるこの項目の内容は短期間では成果が見えにくいものであるため、長期的に継続して取り組むことで、下鴨の子どもたちの力を育てていく必要があります。全体的に教職員アンケートの結果は肯定的であり、教職員自身が真摯に教育活動に向き合い、よりよい学校づくりをめざして努力していることが見てとれます。今後も地道に継続し、子どもたちの成長を支える教育活動に邁進してまいります。

学校運営協議会理事会・開かれた学校委員会からのコメント

昨年度前期の講評で書かせていただいたように、今年度は、理事会と開かれた学校委員会でアンケート項目全体を検討しました。特に児童用項目を減らし、全体的に項目を統合／新設／削除するとともに、できるだけ主語を明確にするなど表現も見直しました。とはいえ、どうしても回答者によって設問の解釈がぶれたり、回答が難しいものがあつたりするのは、アンケートの宿命ともいえます。また、児童・保護者・教職員・地域の4者の比較や、児童では学年ごととの違いなどもあり、結果のすべてを簡潔に示すのも難しいところです。今後もより回答しやすいアンケートづくりと分かりやすい結果の見せ方に向けて、学校とも協力して取り組んでいきたいと思います。

さて、今回の結果については、昨年前期と比較すると、児童では多少の増減はあるもののほとんどの項目で大きな違いは見られません。保護者では子どもとの関わり方でポジティブな回答の割合がやや大きくなっています。いずれも、全体としてはポジティブな回答の割合が高い安定した結果となっています。ただ、毎回思うのですが、児童では「進んで学習」「誰かに相談」「自分の考え」「問題解決への取組」「自分と違う意見」などで否定的な回答の割合がやや大きいです。保護者でも「あいさつ」以外の子どもとの関わりについては同様です。子どもも大人も、実際にできていないからなのか、自己評価の厳しさや自己肯定の低さからなのか、は見極めが難しいところです。できていないなら、もっと伸ばせる、もっと伸ばしたいと思わせ、本人に努力を促したいところですが、それが過度の負担にならないよう気を付けたいといけません。同時に、他者との比較ではなく自身をより肯定的に受け止めることができるよう、家庭でも、学校でも、地域でも、周囲の大人が色々な場面で子どもたちに(またお互いに)さらに働きかけていくことが大切だと思います。

ICTの導入や教科科目の増加など学校のあり方、さらには社会全体のあり方が、保護者を含め大人が小学生だったときとは大きく変化しています。大人が子どもを教える・導くというだけでなく、大人も子どもとともに成長していく、それが必要な時代なのだと思います。